

## 『こわい話』

中学生までに読んでおきたい日本文学8』

松田 哲夫／編 あすなろ書房（2011年）

子を背負った男が歩いている。子どもは声は幼いが、言葉つきはまるで大人である。男はわが子ながら怖くなり、子どもを捨ててしまおうと考える。男と子どもはどうなるのか。夏目漱石の「夢十夜第三夜」は10ページにも満たない短い話ですが、不思議な怖さを感じます。他にも江戸川乱歩や星新一など、誰もが一度は聞いたことのある有名な作家のこわい話を集めた一冊です。言葉の説明も付いていて読みやすくなっています。

## 『神隠し三人娘 ～怪異名所巡り』

赤川 次郎／著 集英社（2002年）

ここは、「すずめバス」。つぶれそうでつぶれない弱小観光バス会社の名物は、本物の幽霊を見に行く恐怖怪奇ツアー。そんなツアーが売りの会社に靈感の強いバスガイド町田藍が入社しちゃったからたいへん。この世に怨みや悲しみを残して何とかしてよと思っている幽霊たちが藍を頼ってやってきて、いろいろな事件を引き起こします。

あなたもこの本を読んで、靈感バスガイド町田藍と一緒に「本物」の幽霊を見に行く怪奇バスツアーに参加してみませんか。



## 『船乗りサッカーの怖い話』

クリス・プリーストリー／著

三辺 律子／訳 理論社（2009年）

嵐の中、具合がわるくなった僕たちのために、お父さんが町へ助けを求めに行ったけど、なかなか帰ってきてくれない。僕たちももう寝ていなくても大丈夫くらいにはなったけど、そんな中ある男がやってきた。男は全身ずぶぬれで海からあがってきたみたいだ。嵐がおさまるまで中に入れてくれという。その間、怖い話が好きな僕たちのために、話をしてくれるという。

「ただ、俺の話は君たちには少々刺激が強いかもしれない。そう、残酷だろうからな。」

## 『悪い本 怪談えほんI』

宮部 みゆき／作 吉田 尚令／絵

東 雅夫／編 岩崎書店（2011年）

この本は悪い本です。読んでいるとだんだん嫌な気持ちになっていきます。表紙は愛らしくまやさるのお人形の絵が描かれており可愛らしいのに、ページをめくるたびに不気味になっていきます。そして、読んでいる人に語りかけてくるのです。いつかどこかではあなたはだれかを嫌いになる。だれかがいなくなればよいと思うようになること…。

短いお話ですが、十分に気持ち悪さがつまっています。

## 『てのひら怪談』

東 雅夫／(他) 編 ポプラ社（2007年）

暑い夏に怪談で涼んでみませんか？この本は、怖い話、不思議な話、奇妙な話をテーマに、上限が800字というルールで書き綴られた物語です。全部で100話の物語がはいっています。どの話も見開き2ページで読み終わるので、隙間の時間に、読んでみてはいかがでしょう。

## 『こわい！不思議！』

### 江戸の怪談 絵事典

～お化け・妖怪から怪奇現象まで～』

近藤 雅樹／監修

PHP研究所（2012年）

江戸時代に「七不思議」といわれる怪談が流行しました。世の中が平和になり、町の人々は、お化けや幽霊などさまざまな怪談話に興じていたことでしょうか。現代と違って電気もなく、<sup>あんどん</sup>行灯の明かりで過ごす夜の暗さの中で、さまざまな想像力が刺激され、この時代には新種のお化けや不思議な現象が数多く語られ、絵にも描かれるようになりました。この本では29種の話が、葛飾北斎や月岡芳年などの<sup>つきおかよしとし</sup>浮世絵を添えて紹介されています。

